

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 69 号

2009年7月



第104回観察会西吾妻ロープ補修ボランティア

6月21日（日）に西吾妻ロープ補修ボランティアを実施しました。今回は米沢ネイチャーフロント（NF）との共同開催です。米沢NFは湿原の荒廃が進行する東大巔周辺や不適切な登山道整備により破壊された馬場谷地湿原周辺の植生回復事業に継続的に取り組むなど積極的な自然保護活動を展開しています。高山の原生林を守る会では西吾妻山域の登山道保全作業に10年来継続して取り組んでいますが、対象範囲が広大であるため、当会から共同開催を申し入れたところ、置賜森林管理署で当該山域の登山道保全事業を実施予定であったことから、今回は、置賜森林管理署（米沢森林事務所）の首席森林官と流域管理調整官も参加しての協同作業となりました。

参加者は共同作業の対象となったAコース（西吾妻小屋周辺）が高山の原生林を守る会から5名、米沢NF8名、置賜森林管理署2名でした。また、Bコース（西大巔水場周辺）は高山の原生林を守る会の3名で作業を行いました。Aコースはかもしか展望台から大凹間の湿原の補修作業を全員で行い、作業の手順を確認しました。西吾妻小屋で2班に分かれて若女平分岐周辺と西吾妻小屋から西大巔方面の湿原の誘導ロープ設置作業を行いました。当初予定した若女平コース下山口湿原は泥炭層がむき出しでコース設定が困難なことから、改めて対応策を検討することとなりました。作業手順の確認を予めしていたことが功を奏して2日前に荷揚げした資材を全て使い切り、これまでになく広範囲に湿原への立ち入りを防止する誘導ロープを設置することができました。今回の取り組みが西大巔周辺の湿原保全に向けた新たな契機となることを願いながら帰路につきました。

～高山の原生林を守る会との『ロープ張り共同作業』に参加して～

ネイチャーフロント米沢 酒井 脩 一

6月21日 8時30分、湯元ロープウェー駅集合。昨夜から降り続けている雨が、やや小降りになる。とは云っても、実施が危ぶまれる今日の天候。そんな中、ネイチャーフロント米沢代表・青柳より、『天候は回復の予報。実施します。』旨の指示が出される。カップを着用し、8時20分のロープウェーに乗車。

天元台到着後、参加者人数の再確認。置賜森林管理署の岩間・奈良両氏の紹介、作業手順等の簡単な説明がなされた。米沢からの参加者は8名。「ロープ張り作業」は、全員が初めてで、説明に傾聴。その後、アキレス腱を伸ばす準備体操をして、リフト乗り場に向かう。

9時35分、第3リフト終点（1820M）到着。風力ゼロ。雲量8～9。雨は、いつしか止んでしまった。雲間からは、薄青い空が覗き、これからの天候回復が約束される。又、西北西から飯豊本山、大朝日岳のY字雪渓、月山の雄姿が雲海の上に望まれる。美しい。雨に濡れたコメツガ、オオシラビソの緑とのコントラストが、今日は特に美しい。

もしか展望台より少し下山し、人形石と梵天岩の分岐点の所で、今日の作業の練習を兼ねて、『古くなったロープの回収。曲がった鉄支柱の矯正（厳冬と闘い、雪に押し曲げられた支柱は硬く、打ちつけるハンマーを跳ね返した。“石を落とすのが、一番ですよ”と、経験者の佐藤さんの助言）。支柱の刺し直し。新しいロープ張り。』等の作業を行う。

時々、山案内人を先頭にして10数名のパーティや数名の登山者が、私達の作業を見ながら「ご苦労さま。」と声を掛けて、木道を渡って行く。嬉しい励みだ。

12時05分、西吾妻小屋到着。風力ゼロ。雲量の観測を忘れる。雨の心配は無し。昼食は、小屋の中で食べるメンバーもいたが、私達は木道に腰を下ろして食べる。12時45分から2時まで、二班に分かれての作業。今回の登山の主目的であるロープ張り作業が行われた。

私は、若女平への下山分岐点付近から天狗岩へ向けての作業に参加。作業内容は、前述した練習内容と略同様。ここでのメンバーは、福島より1名、米沢4名、森林管理署2名の総勢7名。夫れ夫れてきばきと作業に精を出す。皆楽しそうに精を出している。張ったロープの長さは、150M程。木道の両側に、黄色と黒のロープを縫り併せたトラロープを張る。

そして作業が完了したのが1時50分。緑の湿原の中、真新しく張られたロープが輝いて歌っている。張り終えた私達同様に、ロープも満足気だ。

2時には、別班も作業を終えて合流。『うまく張ったね。』『福島だけでは3分の1ぐらいしか、今日は出来なかったよ。』『これで湿原に入らないと良いね。』『泥炭層が、流れないと良いね。』



等の声が聞かれる。

2時10分吾妻神社の前で、全員が笑顔を並べて集合写真撮影。やがてガス上がって来る。遠くで雷鳴の音。早めに下山を開始する。

4時25分、湯元ロープウェイ駅で解散式を行う。福島・佐藤、米沢・青柳両氏から、『今日は、天候が心配でしたが、実施して良かった！福島と米沢と一緒にやれて良かった！単独でやるより、成果も倍増になった！出来れば、今後も共にやりたい！』等の総括がなされた。

美しい吾妻の自然。宝庫と云われる池塘群とお花畑を有する吾妻の大自然。その揺り籠となる湿原が、いつまでも残されるようお願いながら、両氏の総括に賛同したのでした。



第103回自然観察会:浪江室原不動滝のウラジロガシ林と高太石山

渡辺 一

4月26日前日 夜すぎ空は雨模様。今回で観察会は2回目の参加の私はいささか不安な気持ちでした。朝5時起床。準備をして 我が家を6時半出発 小鳥の森駐車場に少し早い7時到着。誰もいない駐車場で雨模様の空を見ながら待っていると山内さんに守る会の方ですねと声をかけられ 少し安心しました。

少し私の事を話したいと思います。20代のころから山が好きで南アルプス縦走、北アルプス縦走、東北の山々と歩きましたが新潟の越後三山の八海山で春山で滑落ムチウチになり以来、山登りをやめていました。小野君から観察会に参加しないかいと誘われ、今にいたっています。

小雨がばらつく中予定通り出発しました。道の駅で待ち合わせて全員そろった所で浪江室原不動滝に出発。途中に車を置き 請戸川溪谷を散策…。不動滝の近くにウラジロガシが 有りました。いつもあまり気にもしない木々に説明をうけると楽しくなってきました。

ウラジロガシや その他の木々を 見ながら溪谷を戻り、今度は 私にとって楽しみの高太石山のハイキング。登りは林の中を 黙々と登り始め、いつしか空は晴れ間が出ていました。途中には数々の山野草が ウスバサイシン、シロバナエンレイソウ、ヒトリシズカ、私にとって恥ずかしいのですが 聞いたこともない花々ばかり。名前を聞きながら楽しいハイキングとなりました。高太石山山頂 は木々におおわれ、さすが高太石山と言う感じです。昼食を山頂で済ませ、今度は帰り足に大ぶなへ。到着すると今日一番の感激の場所でした！見事なシロブナですねと皆さんの感激の悲鳴。いつまでも、いつまでも見ていたい気持ちが本音でしたね。

今回の観察会で思ったことは、知らなかった木々や花々を覚え始めたら、山は宝の宝庫だと思いました。 次回の観察会が楽しみです。



ウラジロガシ



大ブナ

鹿狼山から 9 ～鹿狼山のヤマユリ～

小幡 仁子

7月末になると鹿狼山の登山道のあちこちにヤマユリの花が咲く。この花は、本当に自生種とは思えないくらい豪華で華麗で美しい。この花を、香りがキツくて・・・と敬遠する向きもあるが、鹿狼山に通う者としては自慢にしたい花の一つである。いつか何かの本でヨーロッパアルプスの広大な花畑は美しいが、「日本のヤマユリのように大きくて華麗な花はない」と書いてあるのを読んだことがある。そういえば以前、ヨーロッパアルプスをハイキングしたときもユリ科と思われるような大きい花はなかった。もっともヤマユリは鹿狼山のような標高の低い里山に、半日陰のような所を好んで咲くので、アルプスのように標高の高い所にはないのは当然のことだろう。

さて、今日はヤマユリのつぼみがどのくらい大きくなったかを確かめに行くことにした。というよりも、最近ヤマユリの花が少なくなったような気がして、特に、頂上の杉木立にあるヤマユリは、花が6個付いていて見事であったから、あの株は残っているだろうかと気になったのである。あれは3年前の霧の日だったが、いつものように鹿狼山に登っていてこの大輪のヤマユリに出会った。霧の中で佇む風情が花の精のようで、ぞくっとする程美しかった。それ以来ヤマユリといえば、この日の霧の中のヤマユリを想うのである。

この株はどれであったかと写真を元に探してみた。それらしい株はあるにはあったが、つぼみが5個しか付いていない。ふ～む、別物か、やっぱり。ユリは年数がたつにつれて、花数は多くなるはずである。あんなに立派に咲いていたから、また持って行かれてしまったのかな？葉っぱだってもっと沢山あったしなあ。もう霧の中であの風情のある姿を見ることはできないのか！そう思うと寂しいような腹立たしいような、何ともやるせない気持ちになった。山にある物はそのまま山においてほしいものである。



霧の中のヤマユリは一期一会



風景印の旅（5）アカガシ樹群

鎌田 和子

2008年11月23日に念願の大聖寺のアカガシを訪ねることができました。

2008年3月に兄が送ってくれた浪江町幾世橋郵便局の風景印。その風景印の図案に「県指定の天然記念物・アカガシ」が入っていたことから、「風景印の旅」と称する「照葉樹観察の旅」が始まったのです。私を照葉樹に目覚めさせた記念の「アカガシ」を訪ねるまでに、9か月の月日が経ってしまいました。その間に、福島市平野の医王寺の「シラカシ」を訪ねたり、磐城太田の多珂神社に迷い込み、図らずも「ウラジロガシ」を観察したり、さらに、福島市稲荷神社に「アラカシ」の樹があることに気づき、ドングリが成るか成らないかを半年間かけて観察したりと、「照葉樹観察の旅」を続けてはいたのです。

さて、「大聖寺の天然記念物のアカガシ」を訪ねるまでの、そのアカガシのイメージは、「境内に、常緑の葉を茂らせている巨樹が一本。その木の根元には、ビロードのような風合いの殻斗と褐色のドング

リがいっぱい落ちている、ごくふふうのお寺の光景」でした。ところが、兄の案内でたどり着いた大聖寺は、小高いところに位置し、青々と茂ったたくさんの常緑樹に囲まれていたのです。境内には、唯一、モミジが色よく紅葉し、季節を表していましたが、一瞬、今の季節は？と疑うほどに常緑樹がうっそうと立ち並んでいました。私の想像をはるかに超えたたくさんのアカガシを、どこから観察すればいいのか、オロオロ…。まずは看板を読むことにしました。看板の標題は、「大聖寺のアカガシ樹群」となっています。確かに「樹群」に違いありません。胸高直径が40センチメートル以上の大木が39本、それ以下のものが4本。すごい数だと私は思いました。山門の西には、直径が188センチメートルと、176センチメートルの二本の巨樹があると説明は続いています。これらの大木群はほぼ自然の状態を保っているということです。

なぜ、こんなにたくさんのアカガシが「大聖寺の敷地内」に生育しているのでしょうか。第一の疑問を抱えながら、看板の説明を読み終えると、例によって殻斗とドングリを拾いました。アカガシの本数のわりには殻斗やドングリが少ないと思いました。もっともアカガシは斜面に生えているのですから、全部が境内に落ちはしないでしょう。それにしても、寺の住人がきれいに掃いてしまうのだとしたら、これほどたくさん的大木が落とすであろう堅果や落ち葉を掃くのは大変でしょうと、兄嫁と一緒に感心するのです。兄嫁は知人の屋敷内にあるアカガシのほうが殻斗が大きいし、ドングリもいっぱい落ちていると言います。古木になるとドングリは小さくなるのかなあ。そう言えば、医王寺のシラカシの古木のドングリは丸くて小さかったことを思い出しました。個体差なのかなあ、樹齢と関係があるのかなあ。それにしても、いったい、このアカガシの樹齢はどのくらいのものなのでしょうか。二つめの疑問です。

先ごろ、アラカシの冬芽を見たばかり。それで、アカガシの冬芽も見たいと、あっちの木、こっちの木と探しました。低く垂れた枝先の茎葉の基部を、背伸びして覗いてみるのですが、冬芽はついていません。「アカガシに冬芽はないのかしら？そんなはずないのに…。」と半ば諦めて、兄たちの待つ駐車場に向かって歩き出しました。すると、「私を見て！」と言わんばかりに大きく膨らんだ冬芽が目飛び込んできました。「あつた！」と歓声。そこで観たアカガシの冬芽には網の目のような模様がありました。着物の襟元の合わせ目が幾つも重なっているようにも見えます。アラカシの冬芽とは違うなと感じました。アラカシのは全体が緑色という印象でした。

ほかにももっと観察したいことが残っているような思いを抱きながら大聖寺をあとにしました。帰途の車の中で、見事な「アカガシ樹群」を観察できた満足感に浸りながら、天然記念物の看板の説明の、最後の一行「…学術的にも貴重なものである。」が気になってきました。「学術的とは？…どう貴重だというの？…」と、知りたいこと、確かめねばならないことが湧いてくるのでした(2008. 11. 24)。



東北ブナ紀行 34

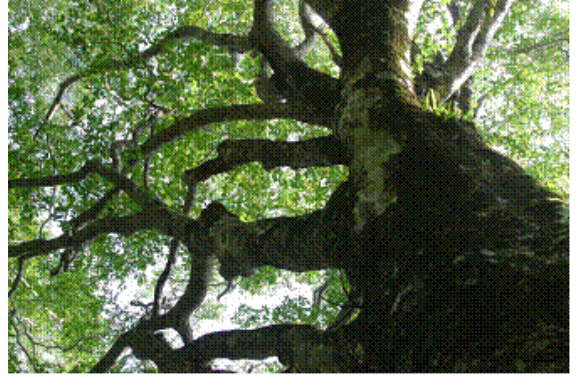
奥田 博

山形県に入ったブナ紀行だが、大きな抜けに気付いた。秋田駒ヶ岳の連峰・烏帽子岳（乳頭山）と岩手の盟主岩手山。行ったり来たりで、なかなか南下できない。秋田駒周辺は、今までも何度か紹介しているが、乳頭山は乳頭温泉周辺と岩手県側の滝の上温泉周辺のいずれも登山口付近がいい。岩手山も山麓にしかブナはない。網張温泉の東側の尾根を冬にたどったことがあるが、ここもブナが残されているが、今回は柳沢登山口からの登山者誰もが目にするブナです。

6 6) 烏帽子岳（乳頭山）

乳頭温泉郷と呼ばれる一帯は、いい温泉に囲まれている。大釜温泉、蟹場温泉、孫六温泉、黒湯温泉など、それぞれに個性に富んだ温泉である。乳頭山には孫六温泉の脇に登山口がある。登り始めると、すぐにブナ林が現れる。ブナだけを鑑賞するなら、10分も登れば十分だろう。この一帯のブナは、多雪地帯であるので雪の影響を大きく受けている。さらに古くから、木地師や薪炭材として伐られていたので、細いブナと太いブナが混生している。それだけに母樹として残したブナは素晴らしい。

山頂は、長いブナ帯を抜けると花の咲く田代平湿原。ここからは展望の得られる斜面をたどる。烏帽子という名前がうなずける急斜面を登れば360度の大展望の山頂となる。なお、滝ノ上温泉側に下っても、登山口近くはブナがいいし、烏帽子岳から千沼ヶ原を経て下る途中の平ヶ倉沼周辺は、ブナに囲まれた聖地である。
コースタイム：乳頭温泉（10分）ブナ林（1時間30分）乳頭山（3時間）滝ノ上温泉



登山口付近の見事なブナ

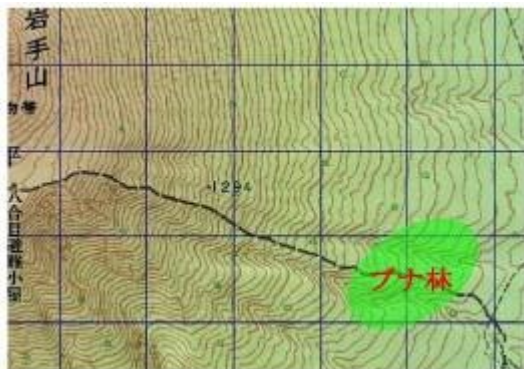


6 7) 岩手山

岩手山は大きな独立峰で、典型的なコニーデ型火山。岩手山中腹にもブナが広がっているが、火山の影響もあって、美しい裾野一面に広がっている訳ではない。あるところが溶岩流であったり、深い谷であったり、スキー場で皆伐されたりとさまざま。この柳沢口は、岩手山登山の中では最もポピュラーなコースだろう。このコースには、登山口からはミズナラ林だが、少し入るとブナ林となる。しかし2時間も歩けば、もうブナ帯を抜けて森林限界になってしまう。この周辺のブナはマダラ状に広がっている



火山礫の上、僅かな土に根を張ったブナ



のは、人の影響ではなく恐らく火山の影響を受けているからだろうか。それだけに貴重な存在であると思う。

冒頭にも書いたが、網張温泉の東側の尾根（旧岩手高原スキー場上部）のブナは、その東隣の御神坂コースをたどっていないので、そこを歩いてから紹介したい。

コースタイム：馬場し（1時間）新旧道分岐ブナ（2時間30分）八合目小屋（40分）山頂

ヤマクワガタ (*Veronica japonensis* ゴマノハグサ科クワガタソウ属)

ミズナラ林からブナ林にかけての溪流沿いの林縁に植生する多年草。吾妻・安達太良山域の植生域は限られている。

葉は十字対生で上下の節で葉対は直交して着く。葉の形は広卵形で葉先は尖る。短い葉柄は明瞭。葉縁は鋸歯があり、同じ形の裂片を規則的に繰り返す。葉の両面には白毛が着生する。

花は合弁花で、腋性であり、茎の先端の対生に着いた葉腋から花茎を1本ずつ伸ばし1対の花序を形成する。花は総状花序だが、小花の数は数個に留まる。花冠裂片とがく片は4片である。雄しべは2本でその間から1本の雌しべが伸びる。花の色は、図鑑類では赤紫色と紹介されているが、私が出会ったヤマクワガタはいずれも青紫系の色合いであった。多分に土壌の特性(pHや含まれる金属成分)を反映しているものと思われる。雌しべが雄しべ2本に挟まれる花の構造により、夕方に花がしおれた時に、直接、葯が柱頭に触れて同花受粉が可能であり、虫媒受粉と併用した繁殖戦略を確保している。

果実は扇形で2片のがくに挟まれる。がく片の先の方が幅広くなって尖っている姿が、かぶとの鍬形に似ていることが名前の由来となっている。確かに、幼い頃に新聞紙でよく作って遊んだかぶとのイメージとそっくりである。

茎は根元で分枝して匍匐して群落を形成する。茎には開出毛(真っ直ぐに伸びた毛)が生える。

「クワガタ」の名前を持つ山岳植物としては、磐梯山固有種のバンダイクワガタが有名である。こちらはミヤマクワガタの品種とされるもので葉が重鋸歯を持つことが特徴である。小花の構造はヤマクワガタと同じであるが総状花序が密なことなどからミヤマクワガタはルリトラノオ属に分類される。



タケシマラン (*Streptopus streptopoides* var. *japonicum* ユリ科タケシマラン属)

ブナ林上部から亜高山針葉樹林帯に生育する多年草。

茎は直立し、通常は途中で2~3分岐し、分岐部から葉を10葉程度、互生して着生する。葉の形は下部が卵のように広いヤナギ葉形で先は尖る。基部はまるく茎は抱かない。両面無毛で平行脈が縦に走る。

先端から3分の2程度までの葉腋から細い花柄を出し、それぞれ1個ずつ花を下垂する。花被片、雄しべともに6個でユリ科の特徴である3の倍数となっている。花被片は、周縁部が黄緑色、内側は淡紅褐色に染まり、質素ながら花らしい装いを整えている。開花は下部の花が早く、順次、上部に向かって開く。花被片は開花した当初は立っているが、やがて平開し、先端は反り返る。

果実は球形で液果である。成熟すると果皮は鮮やかな赤に着色する。果実が黒く着色するものもありクロミノタケシマランと言う。タケシマランの草姿はハウチャクソウに似ており、ハウチャクソウが青黒い果実を着生することから、クロミノタケシマランと間違えやすいので注意が必要である。ハウチャクソウの分布域はタケシマランよりも標高が低く、また平坦な樹林帯内部に多いがタケシマランは樹林帯内部ではなく傾斜のある稜線沿いでよく見られるような気がする。

タケシマラン属の植物はヒメタケシマラン、タケシマラン、オオバタケシマランの3種あるが、福島県ではこのうちヒメタケシマランを除く2種類の植生が確認されている。オオバタケシマランは葉が大型で茎を抱き、花柄の途中に関節があり、そこからねじれており、果実は楕円形である。オオバタケシマランは吾妻・安達太良山域では西吾妻山域にのみ分布する。

タケシマランの属名はねじれた足と言う意味で花柄の形状に由来すると言う。



第 105 回自然観察会案内：達沢不動滝周辺の自然林を探訪する観察会

日時：2009 年 8 月 23 日（日）8：30～16：30

集合場所：四季の里正門入り口駐車場 集合時間：8：30 参加定員：20 名

内容：母成峠を水源とする達沢川沿いの豊かな森と達沢不動滝周辺の自然を満喫し、歴史を学びましょう。母成峠は、戊辰戦争時の激戦地、近代日本が成立する維新の時代に生きた人々の苦しみと闘いの跡が残されています。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300 円） 申し込み：8 月 22 日（土）まで

* その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）

第 106 回自然観察会案内：中吾妻紅葉観察会

日時：2009 年 10 月 18 日（日）7：00～16：30

集合場所：四季の里正門入り口駐車場 集合時間：7：00 参加定員：20 名

内容：この山域の秋の観察会は 14 年ぶりです。中腹のブナの大木やその上部の若いブナ林の紅葉を観察した後、芋煮を楽しみます。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300 円） 申し込み：10 月 17 日（土）まで

* その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）

吾妻連峰の植生回復ボランティアのお知らせ

吾妻山にある弥兵衛平の湿地植生回復作業（主催：米沢ネイチャーフロント）

- ◆ 第一回採種作業（種採り） 8 月 29 日（土）
- ◆ 第二回採種作業（種採り） 9 月 5 日（土）
- ◆ 播種（種まき）・緑化ネット被覆・防霜用むしろかけ作業 10 月 3 日（土）
締切 8 月 11 日（森林管理署・環境省への届出のため、早めの締切りになります）
いずれも 7 時 30 分ロープウェイ湯元駅集合 帰着は 17 時頃
参加費 無料（ロープウェイ・リフトの運賃も無料です）
参加者 吾妻連峰の弥兵衛平湿原まで往復 4 時間の登山が可能な方

持ち物：昼食・飲み物・雨具など登山に適した服装や装備

悪天候による予備日：ボランティア作業では活動日の翌日に設けています。

荒天で延期する場合は、当日朝 6 時 30 分ごろに電話でご連絡いたします。

参加申込先：0238-38-4201、090-2953-0366（白壁）e-mail somabito@amber.plala.or.jp

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】トムラウシ岳での中高年ツアー登山の遭難事故ニュースには驚いた。20m を超える風速での強行。スケジュール優先の判断だったのだろうか。単にスケジュール優先では片付けられない事情があったのかもしれない。いずれにしても山には人間社会の事情など通用しない現実があることをもっと知るべきだと思う。我々も教訓にせねば（M.S. 記）。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第 69 号 2009 年 7 月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間 7 時～9 時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500 円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木